

『#サンセット大通り (Sunset Boulevard)』(1950年、ビリー・ワイルダー監督)をNHK BSで視聴した。ロサンゼルス郊外の豪邸を舞台に、ハリウッドの光と影、サイレント映画時代の栄光を忘れられない往年の大女優の妄執と、それがもたらした悲劇を描いた映画である。栄光に取り憑かれた女優と、夢を失った脚本家の関係は、映画産業そのものの光と影を象徴。女優の放った「私は大きいよ。小さくなったのは映画の方」という台詞は、映画史に残る名言で、時代の変化に取り残された者の悲劇を凝縮している。批評家たちの評価は高く、アカデミー賞3部門での受賞。

豪邸のプールに浮かぶ死体から映画は始まる。ロサンゼルス市サンセット大通りのとある大物の住む邸宅で一人の男が殺害される事件が起きる。プールに死体が浮いており、背中を腹に銃弾が撃ち込まれていた。殺されたのは、B級映画の脚本を2本ほど書いたしがない脚本家である。ナレーター(死体)は事件の発端は半年ほど前に遡ると述べ、回想が始まる。

ナレーターである脚本家のGは、脚本がなかなか採用されず、借金を背負う苦しい生活を送っていた。そんな中、車の代金の取立て屋に追われて逃げ込んだのは、サンセット大通りに建つ大邸宅だった。その屋敷には、サイレント映画時代のスター女優であったDが、召使のMと共にひっそりと暮らしていた。そこでGは彼女が書いた『サロメ』の脚本の手直しをするように要求される。Gは強引なDの要求に応じ、奇妙な共同生活を始める。その後、DはGへの好意を露骨に示し、これを拒んだGは屋敷を後にする。ところが屋敷に電話をかけたGに、Dが自殺を図ったことを知らされる。Gは屋敷へ戻り、それを契機にDの寵愛を受けてジゴロ同然の生活を送るようになる。脚本は完成し、撮影所へと届けられる。

ある日Dに撮影所から連絡が来る。Dは自分への出演オファーだと勘違いし、昔馴染みの監督を訪ねる。撮影所では自分を知るスタッフや俳優達に取り巻かれて一時幸福な時を過ごす。ところが用件は監督からではなく、Dが所有する車を映画の撮影に貸して欲しいというものだった。監督は真実を伝えられないままDを帰す。他方、Gは女性Bから脚本を共作しようと誘われていた。撮影所から戻ったDは、精神的に追い込まれていく。これに対し、Gは毎晩のように密かに屋敷を抜け出してBと脚本の案を練っていた。2人は深夜の撮影所で仲を深めていく。Gの行動を知る召使は、自分とDのかつて夫婦であったを初めてGに明らかにする。その夜、Dも2人の共同作業に気づいてしまう。

ある夜、Bから愛情を打ち明けられたGは屋敷で物思いに耽る。そのときDがBに電話をかけていることに気づき、受話器を奪ってBに屋敷へ来るよう促す。DはGにそばに居てほしいと哀願し、自殺用に拳銃を買ったとも口走る。Bが到着すると、GはDとの関係を自ら暴露し、自分は屋敷に留まると告げる。Bが去ると、Gは屋敷を出るべく荷造りを始める。拳銃を持ち出して引き止めるDに対し、Gは彼女の観客は20年前にいなかったのだと言い放つ。そして車借用の一件や毎日届くファンレターの真実をぶちまけて出て行く。玄関を出たGは、背後からDに撃たれてプールへと落下する（冒頭のシーンに戻る）。そして回想が終わる。

多くの事件記者や市民がDの屋敷に押し掛けており、そこへニュース映画の撮影隊も到着する。刑事の質問に応じていなかったDは、カメラが着いたとの召使の言葉に反応を見せる。召使は大階段の下で映画監督のようにカメラマンとDに指示を出す。Dはそのカメラを映画撮影用カメラと思い、衆目の中でサロメを演じながら、大階段をしずしずと降り、想像の中の観客へと呼びかける。

本作は映画史に残る傑作であり、批評家・観客双方から非常に高い評価を受けているそうだ（少し古めかしい）。ハリウッドの栄光と破滅を描いた作品として、今なお鮮烈な力を持つと評されている。

高く評価されるポイント

- ・主演女優の鬼気迫る演技

サイレント映画の大女優D役で、過去の栄光にすぎる狂気と哀しみを圧倒的な存在感で表現。

- ・監督の構合力

死者の語りで始まる斬新なストーリーテリング、ハリウッド内幕を暴く冷徹な視線。

- ・フィルム・ノワール、ブラックコメディ、心理ドラマの要素を兼ね備え、娯楽性と批評性を両立。

- ・映画史的意義

第23回アカデミー賞で脚本賞などを受賞し、ハリウッド批評映画の金字塔として位置づけられる。

- ・現代的意義

名声や成功に依存する人間の心理を描いており、SNS時代の「自己イメージの囚われ」とも響き合うテーマ性を持っている。

評価：★★★★☆